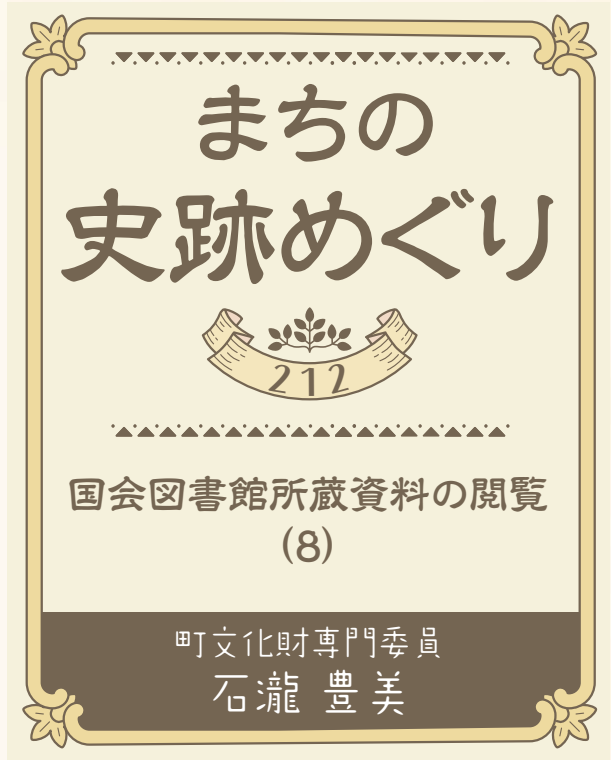




国立国会図書館デジタルコレクションで、「糟屋郡須恵村」を検索した結果を報告します。前回の「高場乱」に続いて、今回も少し方向を転じ、須恵町ゆかりのもう一人の女性「野村望東尼」を検索してみました（「国会図書館内限定」は除外しています）。「野村望東尼」で4293件、「野村望東」で4815件、「野村もと」で258件、「望東尼」で4945件がヒットしました。「望東尼 須恵村」でも174件がヒットしました。

大きな発見がありましたので、野村望東尼の周辺の出来事になりますが、まずそこから触れることにします。『続対支回顧録』下巻（1941年「昭和16年」収録の田鍋安之助の伝記で、それだけで52ページあります。発行は対支功労者伝記編集会で、中国問題に関する功労者の伝記という意味です。田鍋安之助はもちろん「対支功労者」に数えられる人物に違いなく、私もその名前は知っていました。須恵町にゆかりのある人物とは考えてもい

う。引用にあたり、句読点、ルビ、送り仮名などを付け加え、現代仮名遣いに直しました。『福岡県糟屋郡植木村の土豪今泉家は、其の先、同県糸島高祖城主原田左衛門尉種景より出で、種景の弟次郎右衛門種明、民間に下りて植木に移り、始めて今泉氏を名乗るに至った。元来原田氏は源平時代筑紫外数国を領し、原田百万石と呼ばれた豪族で、其の家系は漢の高祖の裔と称せられた家柄である。而して君の曾祖母トラ女は実に此の今泉家の出にして、曾祖母の末妹タツ女（或はミチとも伝う）は福岡藩士三百石馬廻役浦野重右衛門に嫁し、其の三女もと女は明治維新の女流勤王家野村望東尼その人であった。君の家は世々農を業とせるも、後年大陸雄飛の先覚者として著聞せる君を出したのは、蓋し、其の血脈の発露というべく、漢の高祖発祥の地に、其の遠胄（末孫）たる君が新東亜建設の先駆者となったのも、亦甚だ奇しき宿世の運会（めぐりあわせ）といわねばなるまい。』

本は第2次世界大戦に参戦することになります。それより先、1937年（昭和12年）7月7日の盧溝橋事件で日中戦争が始まっていて、1941年はその5年目に当たります。それで「新東亜建設」（戦争遂行のスローガンと見ることができます）という言葉が使われていますが、田鍋安之助の生涯とは関わりのないことです。野村望東尼は福岡市中央区平尾に山荘を構えていました。ここに高杉晋作が匿われたことはよく知られています。現在も跡地が保存され、山荘通りという地名にもなっています。望東尼は福岡藩の代表的な勤王家の一人で、歌人としても知られていました。『続対支回顧録』には、田鍋安之助の曾祖母の妹が、野村望東尼の母であると書かれていたのです。

原田にありー今泉姓の由緒伝える「今泉顕祖碑」（甲植木）同365号（1997年「平成9年」12月）の二つです。野村望東尼の祖父は植木村（当時）の今泉与七で、この人は江戸時代の終わりごろの人物です。江戸時代より前、織田信長と同じ時代の古文書にも今泉与七という名前が出てくるものがあります。筥崎宮の莊園を書き上げた史料に、中原（現在の粕屋町仲原）の今泉与七が耕作している土地がありました。また、1953年（昭和28年）に須恵村が町制を施行して須恵町が成立しますが、その前、1947、1951年に村長を務めていたのが今泉与七でした。3人の今泉与七はおそらく一つの系譜でつながり、代々与七を襲名していたのだろうと想像されます。今泉姓の由緒を語る「今泉顕祖碑」は1892年（明治25年）に建てられたもので、消防の甲植木分団の前にある、赤れんがに囲まれた一画です。以前書いた文章から引くと、「今泉氏の先祖は種景、種明兄弟で、二人の子孫が植木に移り住んだことが、植木の今泉姓の起こりであると書かれています。

ました。」

先に引用した田鍋安之助の伝記でも種景・種明の名がありますが、一部一致しない箇所がありました。続けて、私が書いた文章を引用してみよう。

「大蔵春実（はるみ）は平安時代半ばに活躍した人。天慶四年（九四二）の藤原純友の乱の鎮圧にあたりました。純友は大宰府を襲いましたが、博多で大蔵春実に破られました。これをきっかけに大蔵氏は大宰府の役人となり、九州に勢力を拡大したのです。大蔵氏は筑紫野市の原田に住んで、原田姓を称することにしました。春実の子が種光、その子が種材。種材から数代を経て右衛門尉種景となります。種景が肥前の養父郡今泉庄に住んだのが、今泉姓を名乗った始めです。弟が次郎左衛門尉種明。種景から八代目の種基が、豊後の大友氏に属し、立花道雪（立花山）の立花城に居た戦国時代の武將の指揮を受けていたということ。また種明から七代目の種常も道雪とその子統虎（柳川藩主となった立花宗茂）に仕えていました。」

田鍋安之助の伝記では、種

景の弟種明が植木に移って今泉姓を名乗ったとしていたのが、顕祖碑では佐賀県の今泉という地名から今泉姓を名乗った、種景・種明兄弟が植木に移ってきたことになっていて、少し違いがあります。また、種景の通称も左衛門尉と右衛門尉で違っていますが、くずし字では左と右の混同はしばしば起こります。全体として、田鍋安之助の伝記はよく調べられていると評価してよいと思います。田鍋安之助は他にも須恵町との縁があります。以下は、『続対支回顧録』を要約して示すことにします。

田鍋安之助は1864年（元治元年）糟屋郡山田村猪野（現在の久山町）に生まれました。猪野の大神宮（現在の伊野天照皇大神宮）の神官に寺子屋式の教育を受け、1872年（明治5年）にできたばかりの上山田の小学校に転学しました（数えの9歳）。その後、恩師葉山守夫の転勤に伴い、葉山家から箱崎小学校に通うことになりました。その後、志摩郡初村の小学校長瀧田道介の塾で漢学を学び、小学校にも通いました。12歳の時、医学研究のため、糟屋郡新宮の医師荒木元禮の

書生となり、寝る暇もなく学習に励んだということです。ある時は付近に行路病者の行き倒れがあると聞き、夜陰ひそかにその死体を発掘して解剖の実験に資した、とも書かれています。これは当時でも犯罪であることに間違いありません。

2年後、今度は須恵村の医師原田玄侃の書生となりました。玄侃についても「須恵の史跡めぐり」の第14回「坑跡に落ちた主人を助けるー玄侃さんと忠大軒守（須恵）」「広報すえまち」369号（1998年「平成10年」4月）で取り上げています。須恵川沿いに「原田玄侃翁顕徳碑」があり、今は台座の上に石が載っていますが、本来は銅像が建っていました。

玄侃は東京で医学を修めた新知識で、安之助は1年ばかり住み込みで勉強した結果、英語の必要を悟り、原田家を去って大分県中津の福沢諭吉が開設した私学校に入学しました。その後、福岡にも英学校が開設されたことから、藤雲館後の中学修猷館に連なります（に）学び、1882年（明治15年）、19歳で上京しました。東京では臨時の職を得て働き

ながら苦学し、海軍軍医学校に合格します。学校からは毎月15円が支給されました。1887年（明治20年）に卒業して海軍少軍医候補生となりましたが、その頃は中国問題を志していた、意図的にサボリ、ついに病氣免職の辞令を受けたということです。その頃『東洋の新天地』という本を書き、勇躍上海に赴いたと書かれています。月孫桂士著『東洋之新天地』初篇（1887年「明治20年」）が該当します。奥付には著者兼出版人として「福岡県平民 田鍋安之助」の名が見えます。

その後も中国問題に関わり、後にアジア主義としてくられる運動で活躍することになります。

1924年（大正13年）、61歳の時には人種差別撤廃を掲げて、外遊の希望を抱くことになったと書かれています。アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタ



野村望東尼銅像と平尾山荘

リア、ギリシャ、トルコ、シリア、エルサレム、エジプト、インド、アフガニスタンを旅行しました。アフガニスタンからの帰途は日本人が未踏の中央アジアを横断してロシアに入り、シベリア鉄道を利用して、2年後の初夏、東京に着いています。何ともスケールの大きな人物です。